

# 車社会子ダヌキ哀れ

## 麻布大の野生動物調査で犠牲最多

山地と市街地が交じり合う町田市などの田園地域では、野生動物が交通事故の犠牲となる「ロードキル」が頻発していることが、麻布大(神奈川県相模原市)の野生動物学研究室の学生たちの調査でわかった。野生動物が比較的多く生息し、交通量も多い接点に位置するためと推測されている。最も犠牲が多いのはタヌキで、その8割は1歳以下だった。(上林格)

町田市と神奈川県相模原市の清掃工場で2008年1月～12月に回収された野生動物の死体計300匹を学生たちが引き取り、解剖して調べた。警察などによると、08年に交通事故で亡くなった人の数は町田市7人、相模原市19人。人間に比べ野生動物がいかに多く犠牲になっているかが分かる。

町田市が回収した計120匹の内訳は、タヌキ71匹(59%)、ハクビシン42匹(35%)、その他7匹(6%)。相模原市が回収した計180匹は、タヌキ70匹(39%)、ハクビシン75匹(42%)、アナグマ30匹(17%)、その他5匹(3%)となっていた。両市合わせると、タヌキが全体の47%を占めてトップ。

犠牲になった65%は0歳の子ダヌキで、親離れる秋から冬にかけて事故が急増していた。「数が多いこともあろうが、人間社会とのつきあいの経験が少ないためかもしれない」と、調査を指導した高槻成紀教授はみる。

ハクビシンは春から夏にかけて死亡事故が多発する。解剖の結果、果実をエサにしていることが分かり、実が少ない時期にエサを探して移動するためとも推測できるという。アナグマは冬眠明けの春先に事故が多かった。

事故に遭った個体数を両市の面積で割って比較すると、町田市は1平方メートルあたり1.68匹に対し、面積が4.6倍ある相模原市は0.55匹と約3倍の差が出た。町

## 町田など 田園地域で頻発

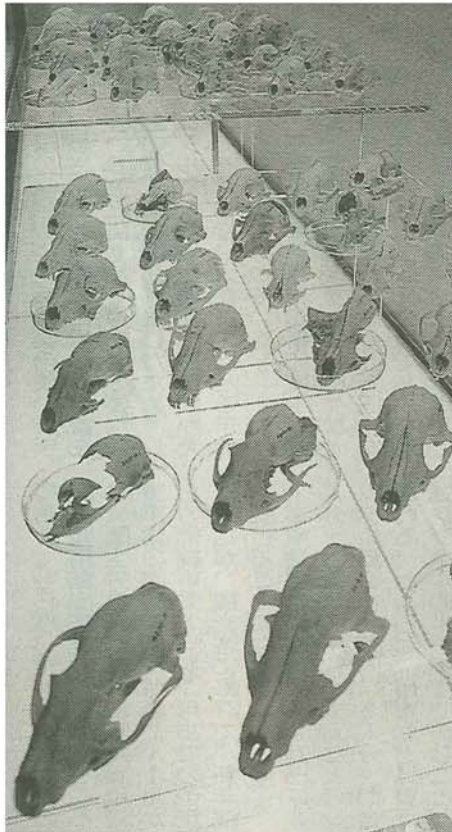
田市の林野率が12%なのに対し、相模原市は合併で市域が山梨県境の山地まで広がって57.6%が山林となり、動物と車が遭遇する確率が低くなつたためとみられている。学生たちはまた、東京と神奈川の全自治体に廃棄物として処理された野生動物の種類と数をアンケートし、回答があった4区15市10町2村について面積あたりの年平均の事故個体数を比較する調査も行った。

事故が多かったのは神奈川県の寒川町3.06匹、愛川町2.65匹、鎌倉市2.46匹、座間市2.22匹など。町田市と同じように、山地と市街地が交じり合う「移行帯」とされる地域で事故が頻発に発生していた。

東京では町田市と似た環境の瑞穂町(林野率16.9%)が2.05匹、稲城市(同14.6%)が1.75匹と高く、武蔵野市1.86匹、日野市1.62匹も目立った。

一方、林野率が90%以上あつても交通量が少ない奥多摩町や檜原村、もともと野生動物が少ない都心の千代田区などでは数値が低かった。高槻教授は「車社会の犠牲になっている野生動物を守るため、人間と共存する方法を考えるきっかけにしてほしい」と訴える。

相模原市淵野辺1丁目の同大獣医学部棟では、解剖した野生動物の頭骨約250点や調査結果を4月23日まで展示している。



物言わぬ野生動物の頭骨が訴える＝神奈川県相模原市の麻布大獣医学部